

# 保育活動内容と小学校教科単元を結び付けた アプローチ・カリキュラムの作成

常葉大学 保育学部 保育学科 山本睦ゼミ

指導教員：教授 山本睦

参加学生：志賀穂南 酒井清正 水野鉄馬 村松美虹

岡田ほのか 城塚陽南子 土屋咲恵

池田夏葵 松本あずさ 竹内平治郎

## 1 要約

昨年度、ふじのくにコンソーシアム事業の助成により、「保幼小連携基礎作りプロジェクト」を立ち上げ、保幼小連携を行う必要性について学ぶことを目的に、現場の声を聞きながら地域連携を行った。その結果、保育者は保幼小接続について教育的配慮を意識しながら接続を行うことが必要であり、小学校での学習内容を把握したうえでアプローチ・カリキュラムの作成に取り組むことが求められていると結論づけた。

これを踏まえ、本研究では、10月に島田市と連携し「保幼小連携研修会」を開催した。市役所職員、小学校教諭や保育者、保護者の方々と交流する場を設け、小学校の教科内容を保幼の活動に落としこんだアプローチ・カリキュラム作成の手順を学生が実際に考案した活動を事例に共有した。また、12月には県下に広く参加者を募って、「第二回保幼小連携研修会」を大学で開催した。

## 2 研究の目的

OECD（経済協力開発機構）のStarting Strong IIIでは、2030年に求められる子どもの姿が挙げられ、それを通して、新しい時代を生き抜くための能力の育成が求められている。今年度常葉大学山本睦ゼミでは「アプローチ・カリキュラム」に焦点を当て、本プロジェクトを進めてきた。

保育者が小学校での学習内容を把握したうえでアプローチ・カリキュラムを作成することが求められているなか、現状小学校での学習内容を把握するための保育者研修などは積極的に行われておらず、アプローチ・カリキュラムに対する意識の二極化が起きているのが現状であることが調査から分かった。保育者と小学校教諭で実際に行っている活動や単元内容を照らし合わせつつアプローチ・カリキュラムの作成を行っていくことによって、これらの問題が改善されるのではないかと考えた。そのため、小学校での学習内容を把握したうえでアプローチ・カリキュラムの作成を行うことの必要性の共有、実際に作成することが研修会の目的であった。

## 3 研究の内容

小学校での学習内容を把握したうえで、実際に単元の内容を保幼の活動に落とし込んだ「アプローチ・カリキュラム」を作成する重要性に対する理解を深めるために、「保幼小連携研修会」を2度にわたって実施した。10月21日（土）は島田市の公立、民間園の保育者、行政関係者を対象に、12月2日（土）は本学常葉大学草薙キャンパスを会場とし、県下の小学校教諭、保育者及び保護者を対象に参加者を募り、研修会を実施した。

## 4 研究の成果

I 10月21日（土） 島田市役所 大会議室東 「保幼小連携研修会」

参加者：島田公立園保育者 6名 島田民間園保育者 9名 保育支援課所属職員 3名

## ○プレゼンテーション

「保幼小接続が重要視された経緯を学ぶ。」「小学校学習指導要領を踏まえたアプローチ・カリキュラムの実践例について共有する。」をテーマに、プレゼンテーションを行った。さらに、平成30年の小学校学習指導要領改訂について、OECD（経済協力開発機構）によって世界の求める子どもの姿が変化したことが基盤となっていることを示唆した。



## ○グループワーク

小学校学習指導要領を踏まえたアプローチ・カリキュラムの重要性について明確にしたうえで、小学校学習指導要領国語（物語、小説）をテーマに実際にどのようなアプローチ・カリキュラムが考えられるか検討する。



○静岡新聞で紹介されました。（2023年11月16日 掲載）



## ○研修会を通して得た学び

学生がファシリテーターとしてグループワークに参加することで、実際に現場で働いている保育者の意見を聞くことができ、実際に取り組んでいる活動のねらいや内容について具体的に知ることが出来た。また限られた時間の中で参加者の意見を引き出すことでグループワークを展開し、現状をイメージしづらい点においては学生が質問して話を掘り下げるなど試行錯誤しながら取り組むことが出来た。研修会を通して大学の講義では学ぶことの出来ない実のある学びとなった。

## II 12月2日（土） 常葉大学草薙キャンパス「第二回保幼小連携研修会」

参加者：静岡県内保育者 16名 小学校教諭 1名 保護者 2名 その他 2名



### ○プレゼンテーション

10月22日（土）に島田市で発表した内容に加え、幼児期に教育的側面を重視するに至った国際的な背景、教育的要素を含めたアプローチ・カリキュラム実践例の共有を図った。

### ○グループワーク

小学校学習指導要領理科の単元（風とゴムの力の働き）に関連する保幼の活動を挙げ、その活動を小学校のねらいと結び付けるために、保育者、小学校教諭、保護者それぞれの立場からどのような工夫が必要なのかを検討する。



### ○研修会を通して得た学び

小学校での学習内容を保育活動へ落とし込むために保育活動を挙げていた際、小学校教諭の方が「新聞紙を身体につけ落とさないように走るなどの遊びから条件を加えて行うことで保幼の活動が小学校での学びに繋がっていく。具体的な遊びというよりもたくさん遊んで経験することが大切、保育活動を活かした授業を行っていきたい」とおっしゃっていた。保育者、小学校教諭、保護者それぞれの持つ知識や技術は異なるからこそ保幼小連携を行うことでより質の高い保育、教育につながるということが理解、共有された。



### ◎質問紙調査結果

#### ○調査の概要

2023年の9月下旬に島田市の幼稚園教諭・保育者42名を対象にFormsにて質問紙の回収を行った。2020年の学習指導要領の改訂後、保幼小の連携が重要視されてきたことから、質問紙では、島田市の保幼小連携の準備度を知

るため、「アプローチ・カリキュラムの作成」、「保育者効力感」、「組織風土」以上3つのカテゴリーから質問50項目を作成した。この調査では、準備尺度の得点を上げるために保育者に必要な要素を明らかにすることを目的とした。

## ○結果

- ・保育者効力感の因子2「個別対応能力」と準備尺度の得点の間に、有意な差が見られた。
- ・架橋プログラムの認知度は54%であり、50～59歳の割合が最も高い。
- ・アプローチ・カリキュラムの準備の進行度は、10～29%という回答が最も多く、回答者のほとんどが50%以下であった。
- ・アプローチ・カリキュラムの意識の二極化が進んでいる。

## ○考察

保育者自身の保育の専門性を上げることで、保育スキルが上がり、保幼小接続の重要性の認識につながっていくことが明らかになった。学習指導要領改訂により研修会が開かれ、保幼小接続の意識や接続に触れる機会が増えている。このような研修会に参加し、連携に対して理解を深め、かつ周りに分かりやすく伝えることで組織の意識が上がってゆき、保幼小の連携がより進むと考えた。

## 6 地域からの評価

参加者を対象に研修会後に実施したアンケート調査から、以下のような貴重なご意見を頂いた。

- ・学生と行う研修は初めてであり、新鮮だった。
- ・教科単元と年長の遊びに結び付けるのは難しさがあったため、年長の遊びが一年生の学習にどうつながるのか学んでいけると保育実践に活かせると感じた。
- ・なぜ生活科の単元ではなく三年生理科の単元であったのか理由を知りたかった。また単元とグループワークでの「風」の意に愛が異なるように感じ、目指す着地点が分からなかった。
- ・保育活動は保育者がどのような部分を育みたいのか、ねらいとするかをしっかり考え保育していくことが大切だと再認識した。
- ・小学校の内容を保育の活動に落とし込むことが核にあったがその結論がどのように導き出されたのかももう少し丁寧な説明が欲しかった。
- ・日常の保育で行っていることが小学校との連携になっていることを改めて感じた。今後は実践していることへの根拠を示していけるようにしたい。
  - ・書籍を読むことも大切だが、実際に研修会に参加すると様々な意見があり、勉強になった。
  - ・参加者が保育関係者ばかりではなく、他業種の方もおり刺激を受けた。また自身ももっと学びたいという意欲に駆られた。

ご多忙の中今回の調査にご協力いただきました島田市の担当者の方々並びに、研修会に足を運んでくださいました皆様に深く感謝申し上げます。

本研修会は現場の声を聞きながら、小学校の学習内容を理解したうえでアプローチ・カリキュラムの作成を行う、保幼小連携の重要性への理解に繋げることを意識し、全力で取り組んで参りました。

次年度以降はアクティブラーニングに着目した活動の展開を検討しています。